

戦後における昭和天皇の短歌—その政治的メッセージとは(二)

二. 天皇は平和主義者だったのか

② あめつちの神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

(一九三三年歌会始「朝海」)

③ 峰つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

(一九四二年歌会始「連峰雲」)

②の作成年は、一九三一年の満州事変に続き、一九三二年三月には満州国建国宣言を行い、血盟団事件、五・五一事件が起きている。かろうじて続いていた政党政治に終止符が打たれ、一九三三年に、日本は国際連盟を脱退、時を同じくしてドイツではヒトラー政権が成立していた。②③の解説としては、

④ ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

(一九三一年歌会始「社頭雪」)

⑤ 静かなる神のみそのの朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞ思ふ」

(一九三八年歌会始「神苑朝」)

などをあげた上で、「一首一首にこもる痛切な平和へのお祈りも遂にむなしく、昭和十六年十二月八日、日本は世界的大動乱の渦にまきこまれて、対米英開戦となってしまった」(夜久正雄『歌人今上天皇(増補改訂)』一九七六年)というものがある。③については岡野弘彦はつぎのような読み方をしている。「ところが太平洋戦争がはじまり、戦時中の昭和十七年のお題<連峰雲>の御製では、戦争が早く終わって平和になるようにとお望みになっていた」と解説する(前掲『おほうなばら』解題 一九九〇年)。

また、一九八九年、これらの短歌をめぐっての昭和天皇追悼記事を見てみよう。

- ・平和への願い、戦時下での苦悩、復興の喜び、国民の生活を思うお気持ち、そして自然への愛情・・・と堅苦しい<お言葉>では表しつくせない率直な感情を、おおらかにそして生き生きと、ときどきの歌に託されてきた」(「ご感慨お

おらかに お歌（七八首）」（『朝日新聞』一九八九年一月八日）

- ・ 沈痛きわまりない感情の表白というべきか。そして陛下が、あの激越な戦争中、ただ祈りつづけてこられたことに気付かせられる。陛下にとっての「昭和史」とは、ことごとに志に反し、ひたすら祈念の時代であったということなのだろうか。（下馬郁郎「御製にみる陛下の“平和への祈り”」『文芸春秋—大いなる昭和』特別号一九八九年三月）

これらを典型とする「平和への願い」や「祈り」を強調する記事が氾濫し、以降も、昭和天皇の平和的イメージをアピールするために幾度となく繰り返されてきた。

昭和天皇の短歌を後年、前述のような手法によって読み解く効果は、すでに戦争を知らない世代にとってはなおさらのこと、さらに「短歌」そのものへの関心が薄くなってきている人々にもたらされる効果は微々たるものであろう。しかし、皇室イベントの折に種々のメディアにより繰り返されることによるアナウンス効果は無視できないのではないか。

「天皇の戦争責任」については、近年多くの識者たちが語り尽くしているかにも見受けられるが、現実には、とくに歌人たちが明確に言及するものは少ない。上記のように「短歌」に託したとする「平和への願い」や「祈り」にすりかえられることが多い。日本の昭和史を読み進めてみれば、大日本帝国憲法下の昭和天皇は元首であって、統帥権を持っていた以上、戦争責任が免れるとは到底考えられないし、天皇が現実果たしてきた役割を見ても、その責任回避は、史実を曲解するものだろう。天皇自身は、記者会見で問われた戦争責任について「そういう言葉のアヤ」「そういう文学方面はあまり研究していない」と発言している。（『ポトナム』2007年3月号所収）